免疫能低下に起因した種々の病気

～ワクチン栄えて国亡ぶ～

医学博士　長尾和宏

麻疹の増加

麻疹が徐々に増えていると報道されている。２０１５年にＷＨＯが日本の麻疹について排除宣言したが、４年ぶりに増えている。急速に増えた外国人観光客が持ち込んでいるのだろう。兵庫県の１例目は偶然だが自分のクリニックで診断された。発熱や咳などの風邪症状で来院されたら、まずはコロナやインフルを疑う。もし陰性ならば、様々な病気の鑑別診断をするが、そもそも若い医師たちは麻疹を診たことがない。

麻疹は中耳炎や肺炎や脳炎などの重篤な合併症を起こすことがあるコロナよりも怖い感染症だ。妊婦には流産や早産のリスクがある。私自身を含めて高齢者は幼少時に罹って終生免疫を獲得している。現在は、１歳代と５歳代に２回、ＭＲワクチンを打つことになっているが法律の狭間でワクチンを打っていないか、１回しか打っていない世代がある。23歳から51歳くらいの間の人のなかに抗体を全く持っていないか、少ない人がいる。母子手帳で確認しても分からないという人は麻疹の抗体検査を４０００円程度で受けるとよい。抗体が無ければ２回、少しなら１回、ＭＲワクチンを打つことが推奨されている。しかし検査とワクチンで合計約３万円の自己負担は大きい。筆者は、コロナワクチンよりもＭＲワクチンを公費負担にすべきとテレビでも主張した。

増えている種々の病気

麻疹以外に増えている病気がたくさんある。コロナ（第９波）、インフル、ノロ、ＲＳ、ヘルパンギーナなどのウイルス感染症である。ヘルペスウイルスによる帯状疱疹は新規感染ではなく、内在しているウイルスが免疫能低下に伴い再興する病気で結核も同様だ。高齢者の誤嚥性肺炎や梅毒の急増なども様々な要因が指摘されている。

一方、関節リウマチを代表とする膠原病や自己免疫疾患も増えている。コロナワクチンを接種して２～３ヵ月後から発症する人が多いが、時間が少し空くため因果関係を同定しにくい。しかし因果関係が明確な自己免疫疾患の増加がリウマチ系の医学会で報告されている。

さらに、がん統計を見ると過去２年間、がん死自体は少し減っているが、その中で増加しているがんがある。乳がん、卵巣がん、白血病、悪性リンパ腫などである。原口一博衆議院議員は「３回目のワクチン接種後に悪性リンパ腫になった」と国会で公表している。発がんの促進ないしがん免疫の低下が疑われる。いずれにせよ、種々の感染症や自己免疫疾患や一部のがんが増えていることは事実である。

ワクチン後症候群（ＰＶＳ）も増加

国が公表しているワクチン関連死が２０００人を超えた。しかし報告されていない事例もあり実態は１桁多いのではないかと、名古屋大学名誉教授の小島勢二氏が指摘している。ワクチン死の遺族らが集う「繋ぐ会」代表の鵜川和久氏は、「ワクチン被害者救済法案」の提出の際のワクチン議員連盟記者会見でもワクチン死の実態を述べた。その詳細は映画「真実を教えてください」のパート１、２に記録されている。

一方、接種後まもなく、少なくとも２週間以内から強い全身倦怠感や動悸、息切れ、歩行障害、認知機能障害などの諸症状が何ヵ月も持続して、就労や就学ができなくなった人がたくさんおられ、「ワクチン後遺症」と呼んでいる。しかし国はその存在を認めず、「接種後に遷延する諸症状」という言葉で責任回避している。これは接種との因果関係が１００％なので国の責任で救済すべきだ。しかし薬害エイズや水俣病の裁判を振り返ると10年～数十年もかかるのだろうか。

そして、関節リウマチや帯状疱疹や乳がんや白血病などの一部のがんなどは、接種との因果関係が十分疑われるものの証明が困難である病態を「ワクチン後症候群（ＰＶＳ）」と呼んでいる。ＰＶＳの増加は海外でも多くの医師が指摘していているが、ｍＲＮＡタイプのコロナワクチンを接種した西側諸国に共通した現象である。

ＰＶＳの土台は免疫能の低下

自己免疫疾患や老衰や肺炎や一部のがんが増えている原因はなんだろう。まずは過度な自粛によるストレス反応が考えられる。精神的にも緊張状態が長期間続くと免疫能が低下する。過度な自粛で筋力や脳機能が低下する〝フレイル〟の増加が指摘されているが、当然の帰結である。筆者は２０２０年４月に「歩くだけでウイルス感染に勝てる！」（山と渓谷社）という本を出版した。本連載においても一貫して高齢者こそ「Ｎｏｔ　Ｓｔａｙ　Ｈｏｍｅ」と主張してきた。フランス政府はその主張どおり昼間は屋外を散歩することを推奨してきた。紫外線を浴びることでビタミンＤが活性化され免疫能が上がるからだ。

しかし日本は現在でも偏った専門家を使った煽り系の報道が目立ち、ワクチン以外で免疫能をあげる方法の啓発はあまり見ない。メディアも政治も医学界も製薬企業に完全に支配されている。そもそも免疫能を直接測る検査法はないが、たとえば口内炎ができること自体が免疫能低下の代表的サインである。免疫には自然免疫と獲得免疫があり、獲得免疫には自然感染とワクチンによる人工的な免疫がある。世界で唯一、５回目、そして６回目を打ち続けている日本人全体の免疫能は世界一低下している。だから今後もＰＶＳという新たな健康被害が続くだろう。５類指定で半永久的に年２回打ち続けることになったコロナワクチン接種だが、中止が急がれる。

長尾和宏
（ながおかずひろ）

長尾クリニック名誉院長

１９５８年生まれ。医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長。１９９５年に尼崎市で開業した長尾クリニックを６５歳の誕生日に定年退職。今後は音楽・映画・舞台など文化活動を通じて、新たな形で医療情報を発信していく。在宅医療、終末期医療、コロナ問題、認知症問題、薬の問題など幅広いテーマで著書を出版。ベストセラーに『平穏死１０の条件』『抗がん剤１０のやめどき』、『薬のやめどき』、『痛くない死に方』（映画原作）、『病気の９割は歩くだけで治る！』シリーズ、『小説 安楽死特区』『ひとりも、死なせへん』など。

長尾の日常を追ったドキュメンタリー映画に『けったいな町医者』、製作に関わった映画に『記録映像　ワクチン後遺症』『夜明けまでバス停で』など。まぐまぐ！の有料メルマガ『痛くない死に方』、ニコニコ動画『長尾チャンネル』を毎週配信中。独自の視点でその時々の社会問題に鋭く切り込み、好評を得ている。

月刊公論202308［00-00］医療最前線.indd　全ページ　2023/06/27　13:35